

# 外国人児童生徒等の学習を支援するプロジェクト

—子ども一人一人を支援できる教員の育成に向けて—

\* 高 橋 亜紀子

## 要 旨

宮城県の学校では外国人児童生徒等が増加している。日本語指導が必要な子どもも増えており、国籍や言語、宗教など、子どもの文化的背景も多様化している。また、県内各地の学校に少数で在籍しており、学校では言葉が通じないため、受け入れや指導、保護者への対応に戸惑うケースが多くみられる。学校には子どもに対する専門的な指導ができる教員がおらず、学校で十分な指導が受けられない子どももいる。そこで、こうした子どもの学習を支援するプロジェクトを実施することにした。将来、宮城県の教員になる可能性が高い学生は学習支援を通じて、外国人児童生徒等への理解を深め、必要な支援や配慮について学ぶことができる。本稿では2022年初夏に行ったプロジェクトを報告し、参加した学生のふり返りのアンケートをもとに、学生が何を学び得たかについて分析し、本プロジェクトの意義と成果について検討する。

**Key words**：宮城県、学校、外国人児童生徒等、教員養成、学習支援

## 1 はじめに

グローバル化とともに、日本国内の学校で学ぶ外国人児童生徒等が増えている。外国人児童生徒等とは「外国人児童生徒や日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒」（文部科学省,2019）のことである。本稿で紹介する実践は、外国人児童生徒等の学習を本学の学生が支援するプロジェクトである。このプロジェクトは、新型コロナウイルス感染症が広がった2020年から始めたもので、運営方法を少しずつ変更しながら実施してきた。本稿では2022年初夏のプロジェクトを報告し、参加した学生のふりかえりのアンケートをもとに、学生が何を学び得たかについて分析し、本プロジェクトの意義と成果について検討する。

## 2 実践の背景

### 2. 1. 外国人児童生徒等に対する教育の重要性

日本の公立学校に在籍する外国人児童生徒等は

年々増加している。文部科学省の学校基本調査によれば、外国籍の児童生徒は2021年度、114,853名と過去最高となった。また、文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査（令和3年度）」では、日本語指導が必要な児童生徒が58,307名（外国籍48,619名、日本国籍10,688名）いる。「日本語指導が必要な児童生徒」とは「日本語で日常会話が十分にできない児童生徒、もしくは、日常会話ができても学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じている児童生徒」を指す。

現行の新学習指導要領（平成29年,2017年告示）の「総則」の「特別な配慮を必要とする児童（生徒）」の項目には、海外から帰国した児童や外国人の児童の指導に対する学校生活への適応、日本語の習得に困難のある児童への通級による指導が取り上げられている。また、中央教育審議会の答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」（令和3年1月）においても、外国人児童生徒等への教育の在り方についての指摘がある。そこには、（1）外国人の子供たちが共生社会

\* 宮城教育大学 教育学部

の一員として今後の日本を形成する存在であることを前提に、関連施策の制度設計を行うこと、(2) キャリア教育や相談支援の包括的提供、母語・母文化の学びに対する支援が必要、(3) 日本人の子どもを含め、異文化理解・多文化共生の考え方に基づく教育の更なる取組、の3つが基本的な考え方として示されている。さらに、教員養成段階における学びの場を提供するために、外国人児童生徒等に関する内容の位置付けの検討を行う必要があることも指摘されている。

このように外国人児童生徒等への教育の在り方やその重要性についての認識が高まってきている一方で、子どもたちの教育を担う教員の量的、質的不足への対応が喫緊の課題となっている(和泉元・棚橋,2022)。

## 2. 2. 宮城県の現状

本学は宮城県にあり、卒業生の多くが宮城県の教員になっている。ここでは宮城県の現状を見ていく。

宮城県には、2022年8月現在、23,345名の外国人が暮らしている。宮城県の人口に占める外国人の割合は1.03%である。2022年1月現在の日本の総人口に占める外国人人口の割合が約2.15% (総務省自治行政局住民制度課,2022) であることから、全国平均と比べても外国人が多い地域とは言えない。しかし、県内の公立学校で学ぶ外国籍の児童生徒数は年々増加している(図1)。

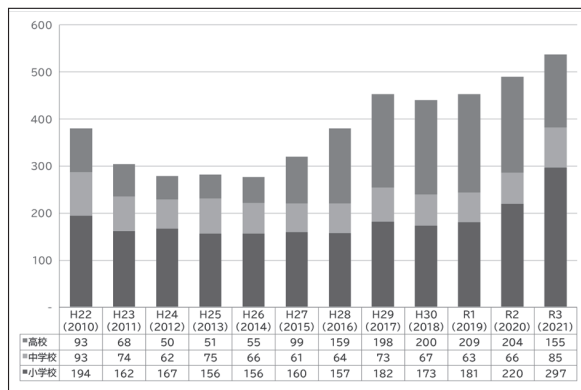


図1 宮城県内の外国籍の児童生徒数  
(文部科学省の「学校基本調査」をもとに作成)

また、「日本語指導が必要な児童生徒」は、2021(令和3)年5月の時点で181名(外国籍139名・日本国籍42名)おり、調査の時期によって増減が見られるものの、増加傾向にある(図2)。

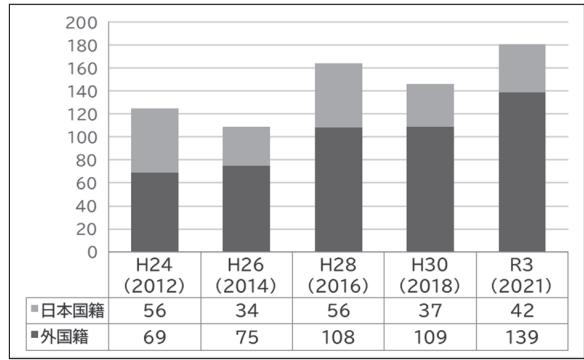


図2 宮城県内の日本語指導が必要な児童生徒数(外国籍・日本国籍)

(文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査(令和3年度)」をもとに作成)

次に、日本語指導が必要な児童生徒の校種別在籍数を集計したものを図3に示す。

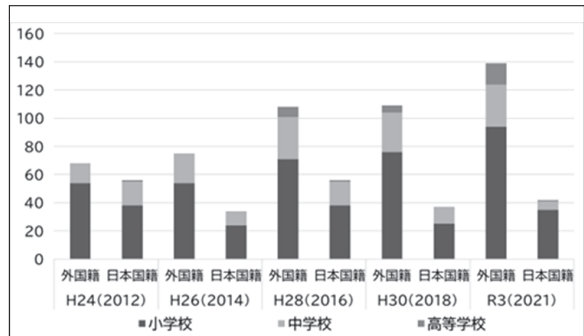


図3 宮城県内の日本語指導が必要な児童生徒の校種別在籍数

(文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査(令和3年度)」をもとに作成)

図3から、小学校で学ぶ児童が最も多いが、中学校や高校にも一定数の生徒が在籍していることがわかる。

では、日本語指導が必要な181名の児童生徒は宮城県内のどの地域に在籍しているのだろうか。宮城県(2022)の第10回宮城県総合教育会議の資料3(同上の「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査(令和3年度)」をもとに作成されたもの)によると、仙台市が87名で最も多く、全体の半数近くである。次いで、大崎市が17名、石巻市が14名、栗原市が12名となっている。5名以上は大郷町(6名)、亶理町(5名)、白石市(5名)である。県内35の市町村のうち25の市町村に在籍している。

宮城県(2022)の同会議の資料3によると、日本語指導が必要な児童生徒の在籍人数別の学校数(外国籍)は表1の通りである。

表1 宮城県の日本語指導が必要な児童生徒の在籍人数別学校数(外国籍)

人数	小学校	中学校	高等学校		
			全日制	定時制	計
1	25	13	1	0	1
2	8	5	0	1	1
3	6	1	0	0	0
4	3	1	0	0	0
5～9	3	0	0	2	2
合計	45	20	1	3	4

(宮城県(2022)の第10回宮城県総合教育会議資料3をもとに作成)

表1から、児童生徒は県内69の学校に在籍しているが、1名のみの学校が大半であり、5～9名在籍しているのは小学校3校と高校2校のみである。

次に、外国人児童生徒の国籍をみてみよう(図4)。図4は宮城県(2022)の同会議の資料3をもとに作成したものである。この図は日本語指導教員の加配申請等を学校が行う際に収集した情報を基に作成されたものである。そのため、県全体の181名に対応した人数ではないとのことであるが、県内の大きな傾向は知ることができる。

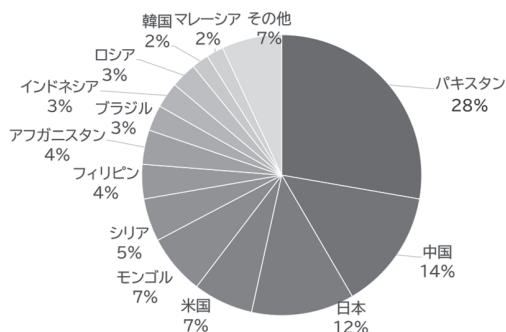


図4 外国人児童生徒の国籍

(宮城県(2022)の第10回宮城県総合教育会議資料3をもとに作成)

図4を見ると、パキスタンが28%で最も多く、次いで中国、日本となっている。パキスタン国籍の児童生徒の保護者の多くは中古車関連の仕事に従事し、イスラム教を信仰している。そのため、学校には子どもの給食や断食、お祈りなどの宗教的な配慮が求められている。

児童生徒の母語に相当する言語別の人数は表2の通りである。

表2 宮城県の日本語指導が必要な児童生徒の言語別人数

	外国籍	日本国籍	合計
日本語	6	15	21
英語	22	9	31
韓国・朝鮮語	1	2	3
スペイン語	1	0	1
中国語	28	7	35
フィリピン語	3	5	8
ベトナム語	5	1	6
ポルトガル語	3	0	3
その他	70	3	73
合計	139	42	181

(文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査(令和3年度)」をもとに作成)

表2より、中国語、英語、日本語の順に多いことが分かる。また、その他は73言語に及んでいる。宮城県(2022)の同会議の資料3によると、その他として、ウルドゥー語や、モンゴル語、アラビア語、タガログ語、パシュート語、インドネシア語、ロシア語、マレー語、ネパール語、クルド語などが挙げられている。

以上をまとめると、宮城県では外国人児童生徒等が増加しており、日本語指導が必要な児童生徒も増加傾向にある。子どもの国籍や言語、宗教などの文化的な背景は多様化しており、県内各地の学校に在籍している。

しかしながら、各学校には子どもが数名しか在籍していないため、日本語指導を専門とする教員は学校には配置されていない。主に、非常勤講師が雇用され、子ども一人当たり週10時間程度の取り出し指導または入り込み指導が行われているケースが多い。非常勤講師が手配できない場合には、学級担任だけではなく、それ以外の教員が分担して指導している。

宮城県の現状からみると、外国人児童生徒等は宮城県内のどの学校にも在籍している可能性が高い。これから教員になる学生は、外国人児童生徒等の担任や教科指導を担当する教員として、学校での受け入れや適応指導、保護者との連絡、日本語や教科の指導、学級づくりなどを行うことになると考えておいたほうがよいだろう。若林(2022)は日本語指導を担当する教員だけではなく、すべての教員が指導に関わる必要性と子どもに最も身近な学級担任の役割の大きさを指摘している。本学は教員養成大学であり、外国人児童生徒等を指導するにあたって学んでおくべきことや具体的

な指導方法などについて、学生に教育を提供していく必要と責任があるのではないだろうか。

### 3. プロジェクトを始めた経緯

筆者は大学で「多文化教育入門」や「日本語教育概論」の講義を担当している。講義の中で、外国人児童生徒等（以下、「外国人の子ども」と呼ぶ）の教育の現状や課題、学校での受け入れや指導、やさしい日本語によるコミュニケーションなどを取り上げているが、時間が限られており、内容は限定的にならざるをえない。そのため、大学の講義以外でも学生が外国人の子どもを支援する活動に関わる機会を提供してきた。例えば、「外国人子ども・サポートの会」というボランティア団体、「さっと日本語クラブ」という外国人の子ども向けの日本語教室、公益財団法人仙台観光国際化協会（SenTIA）の外国人の子ども向けの「夏休み教室」などである。

先に述べたように、宮城県内には外国人の子どもが散在しており、仙台市から離れた学校には支援の手がなかなか届きかない状況にある。この課題をオンラインで解決する可能性を探るために、外国につながる子どものための支援団体 YSC グローバル・スクール（NPO 法人青少年自立援助センター）のオンライン授業や瀬戸市教育委員会の遠隔教育システムを新型コロナウイルス感染症が広がる直前の2020年2月に見学した。その直後の3月から政府の要請により、ほぼすべての学校が一斉臨時休校となった。それとともに、学校以外の様々な支援活動もすべて休止となった。

このような状況の中、2020年8月、SenTIA からの相談を受け、外国人の子ども向けの「夏休み教室」をオンライン実施してみることにした。外国人の子ども12名と本学の学生12名が参加し、2日間実施した。オンライン会議システム zoom を利用し、学生と外国人の子どもが1対1のペアになり、ブレイクアウトルームに分かれて学習するという形態で実施した。この教室に参加した学生は外国人の子どもに対する理解を深め、多くの気づきや学びを得ることができた（高橋,2020）。そこで、仙台市だけではなく宮城県の学校で日本語や教科の学習に困っている外国人の子どもにも学びの機会を提供したいと考え、2020年度後期の「日本語教育概論」の講義で、オンラインで学習支援を行

うプロジェクトを実験的に実施した（高橋,2021、高橋・市瀬,2021、高橋,2022）。

講義を受講した学生は42名で、参加した外国人の子どもは15名であった。学生を15のグループに分け、外国人の子ども1名に対して、学生が2～4名で支援する体制とした。参加した学生からの評価は非常に高かったが、オンラインで行う場合には、グループによる支援よりも1対1の支援のほうが適していることが分かった（高橋・市瀬,2021）。また、講義中にこのプロジェクトを実施する場合、受講者と同数の外国人の子どもが確保できる保証はない。そこで、講義ではなく、ボランティアによる支援に変更することにした。ボランティアにすることで、学内すべての学生を対象に参加を呼びかけることができ、外国人の子どもに対する理解や支援の経験を持った人材を増やすことにもつながると考えた。

大学生が外国人児童生徒の学習を支援するボランティア活動は三重大学や東洋大学、金澤大学などで実施されてきたが（藤本,2009、柴田,2016、志村・深澤,2019など）、教員を目指す学生による活動は愛知教育大学（川口,2020）、上越教育大学（原,2018）、福井大学（半原,2018）などの事例に留まる。また、オンラインによる支援には、学校の臨時休校下の愛知県西尾市の官民学連携による支援（小島他）や広島大学の支援（櫻井,2022）があるが、どちらも一時的なものである。今回のプロジェクトは、教員を目指す学生が外国人児童生徒の学習をオンラインで定期的に支援するという、散在地域ならではの新しい取り組みであると言える。

### 4. ボランティアによる教室プロジェクト

ボランティアの学生が外国人の子どもの学習をオンラインで支援するという新しいプロジェクトを2021年3月（春休み）から始めることにした。このプロジェクトはこれまでに6回行った（表3）。

表3のように、ターム1～6は春休み、初夏、夏休み、秋の順に実施した。実施の形態はターム1が週3回だったが、それ以降は夏休みを除き、週2回、4～6週の期間で実施している。これまでに58回の教室を実施し、外国人の子ども130名、ボランティアの学生136名が参加した。運営はターム1では教員主

表3 ボランティアによる教室プロジェクト

チーム	実施時期	実施形態	回数	子ども	学生	運営方法
1	21年3月 (春休み)	週3回 × 1月	14	20	27	教員 主導
2	21年6-7月 (初夏)	週2回 × 6週	12	20	18	アド バイ ザー の 参 加  教 員 と 学 生 運 営 委 員 の 共 同 運 営
3	21年8月 (夏休み)	2日	2	13	6	
4	21年11-12 月(秋)	週2回 × 6週	12	28	26	
5	22年3月 (春休み)	週2回 × 4週	8	26	34	
6	22年6-7月 (初夏)	週2回 × 5週	10	23	25	
回数合計(回) 参加者合計(名)			58	130	136	

導で行った。しかし、学生がより主体的に参加できる形態で運営したいと考え、チーム2からは学生運営委員を4～5名募り、教員と学生とが共同で運営することにした。また、参加する子どもには小学生が多いことから、仙台市内の小学校の日本語学習室で外国人の子どもの指導を行っていた元教員にも協力を呼びかけ、アドバイザーとして学生への助言を担当してもらうこととした。なお、このプロジェクトは、SenTIAの協力を得て実施している。

ボランティアによる支援にしたことで、学年や専攻・コースが異なる多くの学生が参加できるようになった。学生の中には何度も参加するリピーターも増えている。外国人の子どもは仙台市以外にも、栗原市や大崎市、名取市、大和町、大衡村など、県内各地から参加している。また、幼稚園から高校生まで、年齢も異なる。外国人の子どもの中にもリピーターとして繰り返し参加してくれる子どももいる。オンラインによる支援の場は、学生からも子どもの保護者からも好評で、これまで継続している。

## 5. 2022年初夏のプロジェクトの概要

### 5.1. 目標

このプロジェクトの目標は、本学の学生に外国人の

子どもの学習を支援する場をオンラインで提供し、学生が支援を通じて、外国人の子どもへの理解を深め、必要な支援や配慮を考えることである。

### 5.2. 開催時期

2022年6月1日～7月1日までの5週間、週2回(水曜日と金曜日)、合計10回である。学生及び子どもは週1回または2回の参加を選択する。

### 5.3. 開催までの準備

実施の検討から実施の準備までの流れを図5に示す。

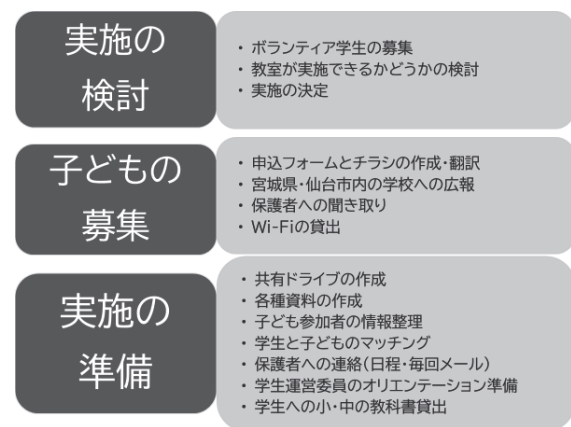


図5 開催までの流れ

まず、教室開始の1か月半ぐらい前までに、ボランティアの学生を募集し、教室が実施できるかどうか検討する。ボランティアが20名程度集まれば、実施する。ボランティアの学生募集は学内のポータルサイトを利用して行う。

実施が決まったら、子どもを募集する準備を行う。広報用のチラシ(図6)と申込用のグーグルフォームを作成する。どちらも、日本語・英語・中国語・韓国語・ベトナム語・ネパール語版を作成する。各国語版に翻訳する作業はSenTIAが担当する。

チラシとフォームが完成した後で、仙台市内の学校にはSenTIAが、宮城県内の学校には筆者がチラシを送付し、子ども募集の広報を依頼する。これまで実施した教室に参加した子どもの保護者にはメールでも教室のお知らせを通知する。申し込みの締め切りは教室開始の2週間前までとしているが、教室開始後に参加を希望する子どももいるため、その場合は可能な限り受け入れている。

初めて参加する子どもの保護者には電話等で聞き

2022年6月

日本語を 母語としない 小・中学生のための  
オンライン教室

日本語を 母語としない 子どものための 教室を、  
皆さんが持っている パソコンやタブレット、スマートフォンを使って 開催します。  
宮城教育大学の 学生ボランティアが 日本語や 学校の勉強を 手伝います。

参加する日を決めてね

6/1~7/1  
水・金  
午後 5:00~6:00

Zoomを使うよ

タブレット、スマートフォンでも  
いいよ

対象:日本語を 母語としない 小学生から 中学生くらいまでの 子ども  
※WEB会議システム「Zoom」を使って、教室を 開催します(インターネットができる  
パソコン、タブレット、スマートフォンを持っていない人は、SenTIAに相談してください)。  
日 時:2022年 6月 1日 ~ 7月 1日 水曜日・金曜日 午後5:00 - 6:00

日	月	火	水	木	金	土
SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	7/1

場所:家、またはインターネットが使える設備  
参加費:無料(0円)  
申込:WEBフォームに、必要な 情報を 入力してください。  
URL: <https://forms.gle/6xHhM9EUsakJhTad>  
わからない人は、電話か メールを してください。  
締め切り:6月19日(木) 定時に食わない場合は、連絡してください。  
〒981-8502 宮城県教育大学 仙台市青葉区本町4-1-1 (SenTIA) 宮城教育大学 学生ボランティア委員会 (MIA)

が  
教室のある日だよ  
参加する日を選んで

(Webフォーム QRコード)

図6 広報用のチラシ(日本語版)

取りを行う。Wi-Fi環境が整っていない家庭には、必要に応じてWi-Fiを、スマートフォンのみの家庭にはタブレットの貸出を行っている。この貸出はSenTIAが行っている。

子どもの募集と同時に並行で、実施の準備を行う。

教員は学生と情報を共有するグーグルドライブを作成する。ドライブには、参加の手引き、教室の連絡事項のファイル、子どもの情報、担当する子どもの割り当て、予定表、記録ファイル、教材などを準備する。

子どもの情報は申し込みフォームの情報(名前、年齢、学年、学校名、国籍、母語、来日時期、日本語力、学校での支援、学校で困っていること、勉強したいことなど)を整理し、個人情報を除いて学生に配布する。また、学生と子どもを1対1でマッチングし、担当者を決める作業を行う。マッチングは、子どもの学年や日本語力、学生の属性などを考慮して行う。

保護者に対しては、教室の参加日、時間、zoomのURLなどをメールで通知する。まあ、教室開催日の前日にもリマインドのメールを送る。

学生運営委員は学生向けのオリエンテーション資料(動画・資料)を作成し、共有ドライブに入れる。そして、教室の開催2週間前にはオリエンテーションをオンデマンド型式で実施する。また、LINEのオープンチャットを作成し、学生間での連絡もとやすい体制を作っている。

このほか、学生には担当する子どもが学校で使用しているものと同じ教科書を貸し出し、支援に役立ててもらおう。

記録ファイルには、今日の記録(何をしたか・どんな教材をどのように提示し指導したかなど)、子どもの様子(できるようになったこと・課題だと思ったこと)、今日の支援を通してどのような気づきがあったか、その他(子どもや指導法について引継いでおきたいこと。また、教員・アドバイザーへの質問・意見など)の項目を用意し、学生は次の支援までに必ず記録することになっている。

初回の進め方とインタビュー項目というファイルを用意し、学生の子どもの関係作りに役立つような自己紹介や名前の確認、簡単な質問などを提示している。

#### 5. 4. 運営体制

運営の体制を図7に示す。

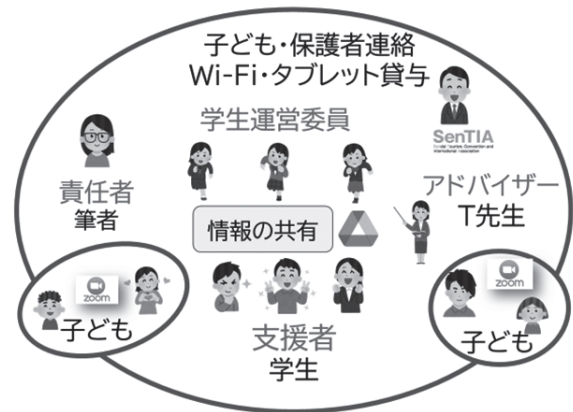


図7 運営体制

運営は、責任者が筆者、学生運営委員4~5名、アドバイザー1名、SenTIAの担当者1名で行う。支援者の学生も含め、教室に関する情報のファイルはすべてグーグルドライブ上で共有している。

#### 5. 5. 参加の手引き

手引きには教室の目的、ボランティアの役割、教室の運営方法、記録の仕方、教材などの教室に関する説明を載せている。また、子どもを理解するための情報として、宮城県の現状、日本語を母語としない子ども、外国につながる子ども、子どもには日本語が通じるのか、日本語が話せることと学校の学習との関係、日本

生まれの子どもの課題、子どもの言語環境、子どもの母語、子どもの言葉の発達、子どもの発達段階における言語習得の現状なども用意している。このほかに、やさしい日本語によるコミュニケーションの方法、オンラインでの支援方法、オンライン支援で使える教材、これまでの参加者の声（コメントや感想など）も掲載している。

### 5. 6. オリエンテーション

学生運営委員が担当する。教室の概要、担当する子どもの確認、共有ドライブの利用の仕方、デモンストレーション用の動画（小2のネパールの子どもと中1のモンゴルの子どもを学生運営委員が実際に支援しているところを撮影したもの）、参加者からの質問への回答、LINEの利用などについてである。参加する学生はデモンストレーションの動画を見ることで、教室や子どもへの具体的な支援の様子をイメージすることができる。

### 5. 7. 当日の教室の運営方法

当日の運営は zoom を用いて、以下のようなタイムスケジュールで行う（図8）。


<ul style="list-style-type: none"> <li>• 16:30～学生ログイン</li> <li>• 16:50～17:00 注意事項の確認 (支援の内容や計画についての確認)</li> <li>• 17:00～17:05 こどもログイン 全体(あいさつ・出欠確認)</li> <li>• 17:05～18:00 個別支援 (ブレイクアウトルームで1対1支援)</li> <li>• 18:00～18:05 全体(あいさつ・自己評価) (今日の学習のふりかえり、あいさつ)</li> <li>• 18:00～18:30 ふりかえり(学生希望者のみ)</li> </ul>	
---	---

図8 教室当日のスケジュール

学生運営委員のオンライン会議システム zoom の担当者は16:30から学生が入室できるように準備を始める。学生は16:50ごろまでに入室し、当日の連絡事項の伝達をし、学生にその日に実施する予定の支援について確認する。17:00に子どもの入室を承認し、全体であいさつを行う。その後で、学生が担当する子どもと1対1のブレイクアウトルームに分かれ、18:00まで個別支援を行う。担当する学生が欠席する場合は、担当の子どもが欠席して空いている学生やアドバイザー、筆者が代わりに支援に入る。子どもの遅刻や欠

席については、筆者が保護者に電話で連絡をして確認する。個別支援の時間はアドバイザーや筆者、担当がいない学生はブレイクアウトルームを自由に見学できるようにしている。

個別支援は18:00に終了し、全体に戻る。学生運営委員は「今日はできましたか」というスライドを子どもたちに見せ、子どもはそれぞれ今日の活動ができたかどうかを、「よくできた」「もうすこし」「もっとがんばりたい」を指で示す。その後で解散する。

解散後、希望する学生はふりかえりに参加する。ふりかえりでは、学生が担当している子どもの様子やうまくいったこと、いかなかったことなどを報告し、解決するためのアイデアを参加者間で出し合う。また、アドバイザーや筆者から支援のヒントやアドバイスをを行う。時間は30分～40分程度である。

なお、初回（水曜日・金曜日それぞれ1回ずつ）は全員でアイスブレイクをしたあとで、ブレイクアウトルームに分かれる。初回の目的は子どもについて知り、楽しく学べるような関係づくりをすることである。

### 5. 8. 参加者

学生の参加者は25名（1年6、2年8、3年6、4年1、院生1、留学生3）である。

指導者は3名で、筆者、アドバイザー、SenTIAのスタッフである。

子どもの参加者は23名（幼稚園1、小学生18〈1年4、2年6、3年2、4年4、5年2〉、中学生2、高校生2）である。

子どもの国籍（二重国籍のものも含む）は、中国5、ベトナム5、パキスタン3、日本3、バングラデシュ1、スリランカ1、ネパール1、トンガ1、ブラジル1、フィリピン1、韓国1である。

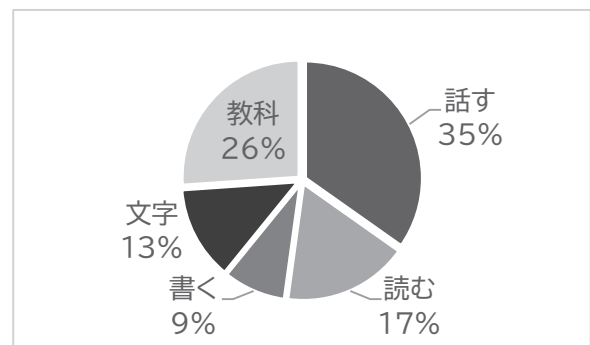


図9 子どもが希望する学習内容

学校で現在日本語支援を受けているのは12名(52%)、以前受けていたが6名(26%)、受けていないが5名(21.7%)である。

次に、この教室で学びたいことでは「話す」が最も多く、次いで「教科」となっている(図9)。

## 5. 9. 支援の内容

支援の内容は子どもの日本語力や学習状況によって一人一人異なる。ここでは実際に行われた支援の内容を簡単にまとめたものを表4に示す。

表4 支援の内容

子ども	子どもの実態・課題	支援の内容
小学生	来日直後で日本語はほとんど話せない	ひらがな、カタカナ、生活会話など
小学生	会話はよくできるが、教科の学習はあまりわからない	算数、国語、理科、社会
中学生	日本語はほとんど話せない	日本語の基礎、生活会話など
中学生	簡単な会話はできるが、教科の学習はあまりわからない	数学、国語
高校生	簡単な会話はできるが、教科の学習はあまりわからない	日本語の基礎

今回参加した子どものうち、来日したばかりで日本語がほとんど話せない小学1年生に対しては、具体物を使いながら物の名前を覚えたり、それを聞いて選んだり、ひらがなで読んだり書いたりしてみるなどの活動を行った。他の1年生に対しては、折り紙を一緒に折りながら、コミュニケーションをとる活動を行った。日本語でのコミュニケーションには問題がない小学4年生に対しては、社会科の日本の都道府県についての学習をしながら子どもの日本での生活体験を聞いたり、グーグルマップを使って一緒に調べながら学習したりした。他の4年生には、国語の教科書の音読をしながら、教科書で分からない言葉の意味を考える、内容について話すという活動のほか、子どもの得意な言葉(母語)を大学生が教えてもらうなどの活動を行った。このように学生は様々な支援を行っていた。

## 6. アンケート結果

### 6. 1. 事前アンケート(参加の動機)

参加申し込み時に学生に参加の動機を聞いた。回

答したのは17名で、この教室に何度か参加しているリピーターが6名、外国人の子どもへの興味・関心があるものが8名、ボランティア活動に興味があるものが6名、英語への関心があるものが3名である。

何度か参加しているリピーターの学生は「一昨年も参加して、子どもたちに勉強を教えながら私自身も学んだことが多かったので、また様々なルーツを持つ子どもたちと関わる経験を増やし、自分の力を高めたいと思ったからです。」「今までの教室に参加した中で、様々な子どもさんたちとの関わりから多くのことを学ぶことが出来たから。」などを参加希望の理由に挙げている。

興味・関心を挙げた参加者は「グローバル化が進行する現代、教育現場にも日本語が障壁となり十分な学習が出来ない児童生徒が増加し続けると考えられる。なので、その第一歩としてボランティアで支援を行いたいため。」「高校時代にある先生から『外国にルーツを持つ子ども』についてお話を聞いたことがあり、私もそのような子どもたちと関わりながら手助けをしたいと思っていたため応募しました。」「子供たちの実際を知る貴重な経験になると思ったから。」など、外国人の子どもを知りたい、関わってみたいという理由が挙げられていた。

ボランティア活動に興味がある参加者は「何かのボランティアに参加したいと考えていたところ、募集があったため。」「仙台市内の小中学校でのボランティア活動が、コロナウイルスにより中止され、再開のめどが立たないため。」「勉強を教えるボランティアに興味があったからです。」などの理由である。

英語への関心がある参加者は「英語が好きで、英語を使用したボランティアに参加してみたいとおもったから」「英語を科目として専攻しているし、子どもが好きなので力になりたいと思った。」を理由として挙げた。

このように参加者の動機は様々ではあるが、リピーターとして参加する学生を含め、外国人の子どもへの興味・関心を持ち、知りたい、関わってみたいと思っている参加者が多いことが分かる。

### 6. 2. 学生への事後アンケート

本プロジェクトの終了時に、学生25名を対象にアンケート調査を実施したところ、20名から回答が得られ



表5 質問に対する評価(単位:人(%))

質問	内容	とても 思う	そう 思う	どちらとも いえない	ない そう 思わ	全く そう 思わ ない
1	参加してよかった	17 (85)	3 (15)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
2	やりがいを感じた	18 (90)	2 (10)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
3	参加の手引きはよい	15 (75)	3 (15)	2 (10)	0 (0)	0 (0)
4	オンデマンド形式の オリエンテーションは よい	13 65	5 (25)	2 (10)	0 (0)	0 (0)
5	オリエンテーションで 教室のイメージが つかめた	11 (55)	4 (40)	5 (25)	0 (0)	0 (0)
6	学生運営委員のオリエ ンテーションはよい	16 (80)	3 (15)	1 (5)	0 (0)	0 (0)
7	教室後のふりかえりは よい	9 (45)	8 (40)	3 (15)	0 (0)	0 (0)
8	教員のコメント書き込 みはよい	20 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
9	教室の運営方法はよい	17 (85)	3 (15)	0 (0)	0 (0)	0 (0)

た(回収率80%)。アンケートの質問1から9の結果(5段階評価)をまとめたものを表5に示す。

表5から、学生の参加者による評価は全体的に高いと言える。

質問1「参加してよかった」に関連して、「よかった点」と「難しかった、課題だと思った点」を自由記述で聞いた。記述に見られたキーワードを中心に分類した。ここでは主な回答例を表6と表7に示す。なお、回答は学生の記述をそのまま掲載する。

表6の「よかった点」として、大きく3つが挙げられた。(1)子どもとのコミュニケーションと子どもの理解に関するもの、(2)教える経験ができたこと、(3)外国人の子どもとコミュニケーションをとるために、日本語をわかりやすくするだけではなく、視覚的に伝える方法などを工夫しながら体験的に学ぶことができたことである。

表7の「難しかった・課題だと思った点」には、(1)オンラインによる支援、(2)日本語によるコミュニケーション、(3)支援内容の検討、(4)子どもの指導が挙げられた。(1)のオンラインによる支援では、通信環境、子どもの声が聞こえにくい、子どもの様子が見えにくいなどの問題が挙げられた。(2)日本語によ

表6 よかった点(件数)

項目	回答例
1 ・子どもとの理解(13)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1人の子どものと、じっくり向き合う時間があったこと。</li> <li>・子どもの僅かな成長を感じることができたこと。</li> <li>・子どもに関われたこと。</li> <li>・小学生と交流ができたこと</li> <li>・子どもたちとのコミュニケーションの経験を増やすことができたこと。</li> <li>・初めてのお子さんだったが楽しく活動できたこと。</li> <li>・子どもと仲良くなれたこと。</li> </ul>
2 教える経験(12)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当した子にとって何が必要なのかを考えたり、1時間と言う短い時間の中で学習のメニューを決め、前回できなかったことを次回に別のやり方でやってみる、といったチャレンジが沢山できたことが良かったです。</li> <li>・初めて子どもに対して勉強を教えるという経験ができたことが一番良かったことだと思います。</li> <li>・子どもの傾向を把握して弱点を克服する方法を考えて実践させるというプロセスを踏んでできたことがとてもよかったです。</li> <li>・他人の教え方を勉強できること</li> <li>・どんなことが苦手でどんなことが得意なのか考えることができ、一緒に何を勉強しようか考えることができた。</li> <li>・どう工夫したら分かりやすいかいろいろ試すことが出来たこと</li> <li>・普通の国語・算数などの授業ではなく、いろいろな教科を通じて「日本語」を教える経験になった。</li> </ul>
3 日本語によるコミュニケーション(6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語を母語としない子どもとの関わりの中で、わかりやすく言い換える工夫だったり、図や絵で表すことで意思疎通を図れたことがうれしかったです。</li> <li>・日本語が得意ではないことのコミュニケーションのはかりかたを経験を通して学ぶことが出来た。</li> <li>・今までとは違って、日本語を聞いたり日本語で話したりするのが苦手なお子さんを担当して、どうしたら伝わるか、コミュニケーションを取るためにはどうしたら良いかなど、自分の中でまた新たな経験をすることができたこと。</li> <li>・日本語でコミュニケーションを取る事が出来ない子どもと初めて関わって、言語の壁を今までで1番身近に感じる事が出来ました。回数を重ねるにつれてコミュニケーションを取る事ができるようになって行ったのが本当に良かったです。</li> </ul>
4 (2) その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生も子どもも新規の人が加わってくれたこと。</li> <li>・次のメンバーもどんどん指導のレポーターが増えていること。</li> </ul>

るコミュニケーションは、よかった点としても挙げられているが、日本語で伝える、コミュニケーションをとることに難しさも感じていたようである。(3)支援内容の検討からは、子どもの実態を把握して何をどう取り上げるのかに悩んでいたことが分かる。(4)の子どもの指導では、特に、低学年の子どもを担当した学生から、子どもの集中力が続かないため、子ども

表7 難しかった・課題だと思った点 (件数)

項目	回答例
1	<p>オンラインによる支援(8)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>接続状況が原因で日によって差が生まれてしまったこと。</li> <li>リモートということもあり、音読で息が合わなかったり、理解しているかしていないかを直に空気感で感じるができないことが難点でした。</li> <li>オンラインだからこそ、通信環境が悪かったりすると声が聞こえなかったり見えにくかったりする点が課題でした。</li> <li>オンラインでの実施のため、やはり技術的な問題の発生への対処が難しかった。ICT 関連にはある程度知識があったつもりだったが、実際に問題に直面してみるとあまりうまく対処できないことがあった。</li> <li>オンラインだからこそそのやりにくさ。</li> </ul>
2	<p>日本語によるコミュニケーション(8)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日本語を日本語で説明することがとても難しかったです。分かりやすく、教えるためには、まず自分がきちんと理解していないといけないと思います。</li> <li>私自身のやさしい日本語がまだできていないと感じた場面もあり、もっと分かりやすい話し方ができるように練習したいと思いました。</li> <li>日本語の発音が不明瞭なとき、何度も聞き返したり訂正したりするのがよいのか、見過ごすのがよいのか悩んだところがあった。</li> <li>分かるような日本語を選ぶこと</li> <li>別のものに例えて表現すること</li> <li>自分が言いたいことがうまく伝わらなかった時に、どのように言い換えたか伝えるかなどを考えることが難しかった。</li> </ul>
3	<p>支援内容の検討(6)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>やりたいことが多く、1回に詰め込みすぎてしまったかもしれないです。</li> <li>担当する子どものできること苦手なことを把握することが難しかった。「○○はできる?得意?」という会話だけではすべてを知ることはできず、たくさんコミュニケーションをとることや教材を工夫してその子にとって必要なことを探す必要があると感じた。</li> </ul>
4	<p>子どもの指導(4)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子供の注意を引く方法</li> <li>子どもが勉強に乗り気ではない時にどうするか。勉強とお話の割合。</li> <li>子どもの集中力が持たないときの対応の仕方が難しかった。</li> </ul>

表8 やりがいを感じた内容 (件数)

項目	回答例
1	<p>子どもの成長が見られたこと(11)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大きい数字の読み方を学習して、次の回ではしっかりと読むことができていたということがあり、少しでも日本語の勉強のサポートができたのだと感じたこと。</li> <li>お母さんを通さないとコミュニケーションを取ることができなかったのですが、最後の方には子供が自らコミュニケーションを取ろうとしてくれて、楽しく教室を行うことができた時にやりがいを感じました。</li> <li>子どもができなかったことが、オンライン教室を通してできるようになったとき。</li> <li>先週できなかったことが今週できるようになっていた時。</li> </ul>
2	<p>子どもの意欲が見られたこと(7)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分から説明してくれようとする意欲を見ることができたとき。</li> <li>子どもが身を乗り出して取り組んでくれたり、「次はこれをやろう」と積極的に取り組んでくれ、やりがいを感じました。</li> <li>はじめは勉強に意欲を持っていなかったが、回数を重ねる毎に「今日は国語やりたい!」というような自分から勉強に取り組む姿勢を見せてくれたから。</li> </ul>
3	<p>子どもと心が通じ合えたこと(7)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>その日担当していた子どもが言いたいことを理解してコミュニケーションが取れたとき</li> <li>自分が言いたいことを理解してくれて、伝わった時は嬉しかったです。</li> <li>子供からたくさん話してくれた時。</li> <li>やりがいを感じたときは子どもがどんどん自分の話をしてくれた時です。初めはどうしてもこちらから質問をすることが多くなってしまいがちでしたが最後の方は私にも質問をしてくれていました。打ち解けてくれていたのかなと感じることができてうれしかったです。</li> <li>回数を重ねるにつれて、たくさんお話してくれるようになったこと。心を開いてくれたのかなと思う。</li> </ul>
4	<p>子どもからの感謝(3)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>最後の授業で「沢山教えてくれてありがとう!書き順もおしえてくれてありがとう」と言われた時は、嬉しかったです。</li> <li>最後に感謝されたことも印象に残っている。</li> </ul>
5	<p>子どもの笑顔(2)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>褒めるたびに笑顔になってくれたこと。</li> <li>ほめたときに笑顔をたくさん見せてくれたこと。</li> </ul>

の注意をどのようにひき、学習にどのように引き込むかという難しさが挙げられた。

次に、質問2「やりがいを感じた」について、どのような時・どのようなことでそれを感じたかを自由記述で聞いた。この記述に見られたキーワードを中心に分類した。ここでは主な回答例を表8に示す。なお、回答は学生の記述をそのまま掲載する。

表8から、学生がやりがいを感じていたことは、(1)子どもの成長が見られたこと、(2)子どもの意欲が見られたこと、(3)子どもと心が通じ合えたこ

と、(4)子どもからの感謝、(5)子どもの笑顔、の5点である。これらの回答からは、学生が子どもをよく観察していたことが分かる。子どもの成長や学習意欲だけではなく、子どもが前よりも話してくれるようになった、心を開いてくれるようになった、笑顔が見られるようになったなどの記述からも学生が子どもと心の通い合うコミュニケーションを重視していたと考えられる。

質問3～6はオリエンテーションに関する質問で

ある。意見として挙げられたのは「ビデオ会議ツールは GoogleMeet の方が利便性が高いかと思います。」「特に LINE で、動画を上げましたなどの連絡がありがたかったです。」のみである。

質問7は「教室後のふりかえり」についてで、この評価はやや低い。これについて「他の学生さんがどんな工夫をしているのか、その工夫に対して子供たちがどのような反応をしていたのかを具体的に聞くことができたのは良い機会だった。また、先生方のアドバイスがとても勉強になった。」「他の人の授業内容を知ることができ、次回の自分の準備に役立ちました。」「他の人の活動を聞くことで自分の活動にも取り入れたり、参考になりました。」などと、ふりかえりで学んだことを次の活動や準備に取り入れようとするという肯定的な意見がある。その一方で、「先生方に直接報告・相談したいことがある人だけが残り、特に問題なかった人はドキュメントに書くだけでいいのでは?と思った。」「振り返りが長すぎるかなと感じてきました。相談したいことがある人のみ残るようにして、(その他の人はちゃんと引き継ぎを書く) 18:00にぴったり終わるようにして欲しいと仲の良い友人にアドバイスもらって、その通りだなと感じました。」という否定的な意見も見られた。多くの子どもが参加しており、一人一人の支援内容の報告を求めると時間がかかってしまう。他者の支援を参考にできる面もあるが、限られた時間の中で、貴重なふりかえりの時間を効果的に行う方法の検討が必要である。

質問8「教員のコメント書き込み」には、「とてもありがたかった」「コメントを書いてくださるのがとても励みになった」「先生方のアドバイスがとてもありがたかったです。いつも取り入れさせていただきます」「次回以降何をすべきかととても参考になりました」などが見られ、コメントへの評価は高い。

質問9「教室の運営方法」については特に意見はなかった。

最後に気づいたことや学んだこと、感想を自由記述で回答してもらった。ここではその一部を取り上げる。なお、回答は学生の記述をそのまま掲載する。

まず、初めて参加した1年生の感想である。子どもと日本語が通じない不安や心配があったが、コミュニケーションの方法を工夫することで子どもとのやりとりできるようになっていたことが分かる。

日本語を母語としていない子どもたちとコミュニケーションが取れるかということを最初にすごく心配していましたが、伝えたいという気持ちがあればいろいろな方法で伝えることができるということを感じました。教員になったときにはいろいろな背景を持つ子供たちと関わることになると思います。その中でも不安がることなく接することができると思えました。これから多文化理解に常に関心をもって、たくさんの人と関わる活動をしていきたいと思っています。(1年N)

最初は上手くできるか不安で、なかなか自分の考えを上手く伝えることが出来ずにいましたが、だんだん緊張せずに楽しく活動出来ました。また、T先生の「言葉で言葉を表現することは難しい」という言葉が心に残っています。つい言葉で言い換えてしまうので、図や絵を使って説明するなど、将来に繋がることを学ぶことが出来ました。また参加したいです。(1年M)

次にリピーターとして参加した学生の感想である。何人かの子どもを担当した経験から、子どもの個性や日本語力、意欲、学習の仕方などの違いに着目するようになり、子ども一人一人に合った支援を考え、それを工夫しながら実施していた。

日本語のレベルや学習への意欲、取り組み方はお子さんによって異なることを改めて実感した。(2年T)

今回も楽しく支援ができました。子どもを上手くやる気にさせるにはどうすればいいのだろう?と考えながら取り組みましたが、まだ明確な答えはできていません。これからも考え続け、次に参加する機会があればもっとより良い時間になるように頑張りたいです。(2年M)

これまでの2回は中学3年生のお子さんを担当していたが、今回初めて小学1年生のお子さんを担当した。日本語に慣れるところからのスタートだったので、教えようとするよりも興味をもって楽しく参加してくれるような工夫を大切にしながら、新鮮で貴重な経験ができた。

また、日本語に慣れていないので緊張しないように英語を時折使いながら褒めたり、遊び要素を多く取り入れたりすることを心掛けた。それぞれのお子さんの興

味関心や日本語のレベルなどを毎回の教室の積み重ねを通して知っていくことで、試行錯誤しながらその子に合った教材の工夫を考えていくことが大切であると学んだ。(3年W)

日本語を書く・読む・話すの3つのことを同じように学んでいくのは大変だなと感じた。今回のHは話すことはとてもできていたのでそれを生かして書く・読むの練習ができるといいのかなと思った。他の子どもの話を聞いていても一番難しいのは読むことなのかなと思ったので国語の教科書や絵本を利用して力をつけていくことができると感じた。また同じ学年の子でも日本にいる年数や生活している環境によって日本語がどれだけできるのかという違いや性格の違いを知ることができた。それぞれの子に合った勉強をすることが大切だと改めて感じた。(2年K)

このほか、子どもと接する中で、子どもについての多くの気づきがあったという感想も見られた。

子どもたちが好奇心旺盛で、おしゃべりが大好きで、いろんなことをいっぱい知りたいし、自分のことをいっぱい喋りたいという気持ちを持っていることに気がきました。このような機会を設けることで、子どもたちの心の居場所は作れるのかもしれないと感じました。子どもの反応から学ぶことは沢山あって、こんな説明はわかりやすいんだ、これだとダメか、というようにどうすれば言いたいことを伝えることができるかを考えるのが楽しかったです。(1年I)

子どもはこちらの気持ちに敏感なんだということが大きな気づきでした。初回の授業ではこちらの緊張がダイレクトに子どもに伝わってしまってなかなか上手く進めることができなかったのですが、反対に楽しいという気持ちも子どもはしっかりと受け止めてくれて楽しいと返してくれたのでとても嬉しかったです。これは外国につながる子どもだけではなく、全ての子供に言えることではないかと思うので、教育実習に活かしたいです。(3年N)

信頼関係を築くことの重要性を学ぶことが出来た。初回はお互い緊張していて上手くいかないことも多かつ

たが、最終的には話しかけてくれたり遠慮せずに発言するようになってくれたりしたので自分自身楽しく支援することが出来た。(2年T)

子どもたちは学習に対して非常に高い関心を持っており、その大きさや方向性は様々あれど、常に周囲の環境を吸収して成長しようとしていることを直に感じた。その中で、私たちの役割は、それらのエネルギーが向かう方向性を照らし出してあげるのではないかと思う。私は新たに何かを始めたり、学ぼうとしている人に様々な道を照らし出すことのできるような人間になりたいと、このボランティアを通して改めて感じた。

(1年S)

以上のように、学生は本プロジェクトに参加し、子どもと向き合う中で多くのことを学んでいた。特に、リピーターとして参加した学生は外国人の子どもへの理解が進み、支援の内容を工夫するなど、学びをさらに深めている様子が窺えた。

### 6. 3. 保護者へのアンケート

保護者に対するアンケートも実施した。回答は7名のみであるが、ここでは簡単に報告する。なお、自由記述に書かれていたことはそのまま「」で示し、修正は加えていない。( )は中国語の回答を筆者が日本語訳したものである。

まず、保護者の満足度は「非常に満足」が86%で、非常に高い。次に、子どもの満足度は「非常に満足」と「やや満足」を合わせて100%であり、こちらも満足度が高い。子どもの感想には「先生と日本語で話すことが楽しかったです」「楽しいでした。」「楽しかった」「很快乐(楽しかった)」「私は、このクラスに参加できてとてもうれしいです。」「とても良かったでした。」「She like talking to the teacher.」などが挙げられており、子どもが学生との学習の時間を楽しんでいたことが分かる。

保護者が挙げたよかったところは「日本語で考えられる勉強ができてよかったです」「一対一で子供のレベルに応じて日本語を教えます。」「不用赶时间去现场,不出门就可以学习(教室に行かなくても家から出ずに勉強できる)」「先生が優しいです」「先生は、優しくました。わからない時に、教えてくれました。」

「勉強を教えること。」「I like the online class to keep my daughter time busy on study instead of going out play. Not only that but to improve her learning.」である。

また、保護者は日本語が分からないために、子どもの勉強や宿題を手伝うことができないと感じていることも分かった。オンラインによる学習支援は子どもだけではなく、不安を感じている保護者への支援にもなっていると言える。

## 7. 考察

本稿では2022年初夏に行ったプロジェクトについて報告し、参加者に対して行ったアンケートの結果を分析した。ここでは結果をまとめるとともに、本プロジェクトの意義と成果について考察する。

### 7. 1. 結果のまとめ

まず、本プロジェクトに参加した学生の動機は様々であるが、何度か参加しているリピーターの学生を含め、外国人の子どもへの興味・関心を持ち、知りたい、関わってみたいと思っているものが多い。

また、このプロジェクトに対して学生からはよい評価が得られた。よかった点として挙げられたのは、子どもとのコミュニケーションや子どもへの理解が深まったこと、教える経験ができたこと、外国人の子どもとコミュニケーションをとるために日本語をわかりやすくするだけではなく、視覚的に伝える方法などを工夫しながら体験的に学ぶことができたことである。一方、難しかった・課題は、オンラインでの支援、日本語によるコミュニケーション、支援内容の検討、子どもへの指導であった。

学生がやりがいを感じていたのは、子どもの成長や意欲が見られたこと、子どもと心が通じ合えたこと、子どもからの感謝、子どもの笑顔が見られたときである。

学生の気づきや学び、感想からは、本プロジェクトへの参加を通じて、子どもから多くのことを学び、リピーターとして参加する学生は外国人の子どもへの理解とともに、支援の内容やその工夫などについての学びをさらに深めていたことが分かった。

保護者と子どもからは楽しく学べてよかったとい

う評価が得られた。本プロジェクトは子どもの支援だけでなく、日本語が十分に分からない保護者への支援にもなっていることが分かった。

### 7. 2. 考察

本プロジェクトは、本学の学生に外国人の子どもの学習を支援する場をオンラインで提供し、学生が支援を通じて、外国人の子どもへの理解を深め、必要な支援や配慮を考えることを目標として実施した。学生が外国人の子ども一人一人に向き合い、子どもの課題を見つけ、支援に結び付けていかなければならないため、学生にとって難しい活動であった。しかし、アンケートの結果から、学生が担当する子どもを大変よく観察し、子どもとのコミュニケーションを重視し、子どもの意欲を引き出すために様々な工夫をしていること、日本語によるコミュニケーションの方法についても試行錯誤しながら学んでいることが明らかになった。特に、リピーターの学生には、子どもの性格、生活環境、日本語レベル、学習意欲、興味関心などが一人一人異なり、子どもの実態に合った支援や教材を工夫する必要性を認識している様子が窺えた。これらの学びから、本プロジェクトの目標は達成できたと考えられる。

古川(2019)は、日本語指導担当1年目の教員が外国人の子どもの日本語指導を通して得た学びについて調査している。そこでは、教員が子どもに寄り添う、子どもを支えるという視点からの関係づくりを重視するようになったこと、教員から子どもへの働きかけよりも子どもの様子の観察・把握を重視するように変化したことが報告されている。また、教員歴20年以上の教員に対する調査でも一人の児童をより多角的に把握しよう、認めていこうという視点の広がりが見られたことが指摘されている。

本プロジェクトの学生の学びは古川で明らかになった教員の学びに重なる。学生は一人の子ども(あるいは数名)に教えた経験しかないが、目の前にいる外国人の子どもと心の通い合うやりとりを通じて、子どもの様子を観察し、理解しようとしていた。このように子どもを理解しながら、支援を行うことは教員を目指す学生が身に付けておくべき大切な姿勢であり、本プロジェクトで提供できた学びとしての成果であろう。

また、藤井・孫(2015)は外国人散在地域の学校の

学級担任に対する聞き取り調査を行っている。外国人の子どもは担任にとって経験したことのない新しい存在で、事前に十分な準備もなく彼らの受入れと指導を行わなければならない。そして、日本語が通じないのでどうすればいいかわからないという挫折感を感じているという。このような担任の声は少数の子どもが在籍している学校が多い宮城県の教員にも当てはまるであろう。今回参加した学生は外国人の子どもとのコミュニケーションの取り方を体験的に学んだ。こうした体験は外国人の子どもを担当する教員になったときに、最初の壁になりやすい言葉の問題から逃げるのではなく子どもや保護者とのコミュニケーションを積極的に取ろうとすることにつながるのではないだろうか。

そして、外国人の子どもは日常的な会話で困らなくなると、教科学習にも問題がないと教員に判断されがちである。しかし、子どもが教科学習で母語話者レベルについていけるようになるには少なくとも5年以上が必要である(文科省,2014)。ある学生は「私が担当した子は、日本語で話したり聞いたりするにはあまり支障がなく、初めて会ったときは学校での勉強にどんな難しさがあるのだろうか、予想できませんでした。しかし、一緒に勉強することを通して苦手な部分、支援が必要な部分が見え、外国とつながる子供は困難がたくさんあるのだと実感しました。」と述べている。これは日本語では特に問題がなさそうに見える子どもであっても、指導上の配慮が必要であることへの気づきとなったのではないだろうか。

以上から、学生が、(1)子どもをよく観察して実態を把握すること、(2)日本語が伝わらなくても伝えるための工夫をしてコミュニケーションをとること、(3)日本語ができているように見える子どもにも課題があり支援が必要なこと、に気づくとともに学ぶ機会を作れたことは、本プロジェクトの大きな成果である。また、本プロジェクトはオンラインによる支援であった。この形態は、宮城県のような散在地域で支援の手がなかなか届きにくい学校にいる子どもや教員にとって有効な支援の方法になるのではないだろうか。そして、日本語が十分に分からず、子どもの学習を見ることができない保護者の支援にもつながるという意味で、大きな意義があると言えるだろう。

しかしながら、本プロジェクトは、学生が外国人の

子どもの現状を知り、コミュニケーションを取り、支援をしてみるという、言わば、支援の入り口の段階である。日本語の力や教科学習上の課題も異なる一人一人の子どもに対して適切な支援ができるようになるには、実践を裏付ける理論的な学習が必要である。今後は、子どもの実態に応じた日本語や教科の指導をどのように行えばよいかについて学ぶ機会を作っていく必要がある。

## 8. おわりに

本プロジェクトは小さな試みではあるが、教員を目指す学生にとって、子どもに向き合うことで、目の前の子どもを理解して支援することの大切さに気づききっかけになったのではないだろうか。日本の学校で学ぶ外国人の子どもが直面する困難を想像し、子どもに寄り添った指導ができる教員を一人でも多く現場に送り出せるように、このプロジェクトを継続していきたい。

外国人の子どもを指導している宮城県内の教員は「外国人の子どもを担当してはじめて、日本人の子どもも実は一人一人違っていったことに気がついた。一人一人違うことを前提にした指導をする必要がある」と述べている。この発言から外国人であろうとなかろうと、教員は目の前の子ども一人一人を理解することが重要であると考えられる。若林(2022)は外国人の子どもという異なる存在を学校にどう適応させるかという取り組みが中心にされてきたが、多様性を認め合う豊かな社会を形成するためには、受け入れ側である日本人も含めた双方がどう適応し合うべきかを考えることが大切だと指摘している。

また、高橋(2018)は障がいの有無で子どもを分けるのがインクルーシブ教育ではないと述べている。そして、日本語指導が必要な子どもの教育も特別な教育的ニーズを有する子どもの支援という大きな枠組みで捉えるべきで、問題を個人に還元することは適切ではないと指摘している。つまり、教員には障がいや国籍で子どもを分けるのではなく、子ども一人一人の多様性を認め、個のニーズに応じた学びの支援ができるような指導力が求められていると言える。

本学は教員養成大学として、外国人児童生徒教育に関する施策や動向、子どもの受入れや子どもの言語習

得、日本語や教科指導の方法、担任の役割、多文化教育などについてすべての学生が学ぶ機会を提供していく責任がある。同時に、子どもたちがそれぞれの多様性や価値観を認め合いながら、共に学び合えるような学校や学級づくりをしていくことの重要性、それが多様性を認め合う多文化共生社会を作っていくことにつながるという視点も取り入れ、指導にあたっていきたい。

## 謝辞

本プロジェクトの開催にあたっては、公益財団法人仙台観光国際協会 (SenTIA) の協力を得ました。また、教室に参加してくれた本学の学生、外国につながるお子さま、保護者の皆さま、アドバイザーの田村由香子先生、SenTIA の五十嵐丈士さんにも心から感謝いたします。

## 参考文献

- 和泉元千春・棚橋尚子 (2022) 「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成の実践と考察」『奈良教育大学国文一研究と教育』,45,89-100.
- 川口直巳 (2020) 「愛知教育大学における学生の育成を中心とした外国人児童生徒支援—この10年の変遷から—」『外国籍児童生徒の就学義務をめぐって』,4,15-23.
- 小島祥美・川上貴美恵・菊池寛子・鈴木貴之 (2021) 「学校休校下における外国人児童生徒に対するオンライン支援の実践—官民学連携による支援活動「あいうえお240 (にしお)」報告」『ボランティア研究』,21,89-97.
- 齋藤ひろみ (2022) 「外国人の子どもの学習を取り巻く問題」齋藤ひろみ編著『外国人の子どもへの学習支援』金子書房,4-16.
- 櫻井千穂 (2022) 「臨時休業下におけるオンライン学習支援-教員養成の観点から」『外国人の子どもへの学習支援』金子書房,50-57.
- 志村恵・深澤のぞみ (2019) 「多文化共生社会を促進する場としての外国につながる子どもたちへの学習支援」『金沢大学国際機構紀要』,1,45-59.
- 総務省自治行政局住民制度課 (2022) 「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数のポイント (令和4年1月1日現在)」[https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000762474.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000762474.pdf) (2022年10月30日閲覧)
- 高橋亜紀子 (2020) 「外国人児童生徒を対象としたオンライン学習支援での学生の学び」『宮城教育大学紀要』,55,343-357.
- 高橋亜紀子 (2021) 「外国につながる子どものためのオンライン教室の実践報告-教員養成大学の学生による学習支援-」『日本語教育方法研究会誌』Vol.27, No.1, 92-93.
- 高橋亜紀子・市瀬智紀 (2021) 「外国につながる子ども支援における学生の学び—「オンライン教室」のレポートの分析から—」『宮城教育大学教員キャリア研究機構研究紀要』,3,43-54.
- 高橋亜紀子 (2022) 「外国人児童生徒等を支援する学生の困難点と学習ニーズ—支援の場の改善に向けて—」『宮城教育大学紀要』,56,303-318.
- 高橋登 (2018) 「特別支援教育が日本語教育に貢献できること」『子どもの日本語教育研究』,1,17-30.
- 中央教育審議会 (2021) 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して (答申)」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985\\_00002.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm)  
(2022年10月28日閲覧)
- 原瑞穂 (2018) 「外国につながる複言語複文化の子どもへの二言語での個別学習支援経験による教職志望学生の学び」『上越教育大学研究紀要』,38 (1), 65-73.
- 半原芳子 (2018) 「外国籍児童生徒への協働的学習支援プロジェクトを跡づける」『教師教育研究』,11,225-236.
- 藤井美穂・孫恩恵 (2015) 「小学校におけるニューカマー児童の受入れと指導:U市の学級担任教師の認識と態度を中心に」『熊本大学教育学部紀要』64,105-112.
- 藤本久司 (2009) 「外国籍児童生徒への学習サポート:大学生ボランティアを中心とした活動その後」『人文論叢:三重大学人文学部文化学科研究紀要』,26,161-174.
- 古川敦子 (2019) 「外国につながるを持つ児童生徒の教育実践の意義:日本語指導を担当した教員の学び」—橋大学博士論文
- 宮城県 (2022) 「第10回宮城県総合教育会議 (2022年1月24日開催) 資料3「外国人への教育体制の整備について」  
<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/kyou-kikaku/sogokyouikukaigi-top.html> (2022年10月28日閲覧)
- 文部科学省 (2014) 「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm) (2022年10月28日閲覧)
- 文部科学省 (2017) 「小学校学習指導要領 (平成29年告示)」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1384661.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm) (2022年10月28日閲覧)
- 文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領 (平成29年告示)」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1384661.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm) (2022年10月28日閲覧)
- 文部科学省 (2019) 「外国人児童生徒受入れの手引き (改訂版)」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm) (2022年10月28日閲覧)
- 文部科学省 (2021) 「学校基本調査—令和3年度 結果の概要—」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k\\_detail/1419591\\_00005.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1419591_00005.htm)  
(2022年10月28日閲覧)
- 文部科学省 (2022) 「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 (令和3年度)」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/31/09/1421569\\_00004.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/09/1421569_00004.htm) (2022年10月28日閲覧)
- 若林秀樹 (2022) 「『適応指導』とは—一学校における教員の役割」『外国人の子ども白書 (第2版)』明石書店,116-117.

## 付記

本研究の一部は、科学研究費交付金(20K20801)の助成を受けて実施したものである。

(令和5年2月7日受理)



# A Report on The Learning Support Project for School Children with Foreign Backgrounds

: On Teacher Training Course Students Who Can Understand Children's Needs and Difficulties

TAKAHASHI Akiko

## Abstract

The number of school children with foreign backgrounds in public schools in Miyagi Prefecture is increasing. The children who need Japanese language instruction also increased. In addition, a small number of school children with foreign backgrounds are enrolled in public schools in all over the Miyagi prefecture. Since school children do not understand Japanese, teachers are confused about how to accept them, guide them, and communicate with their parents. Therefore, I decided to implement a project to support those children's learning. It is expected that students who are likely to become teachers in Miyagi Prefecture in the future will deepen their understanding of school children with foreign backgrounds and learn about necessary support and consideration through learning support. This paper reports on the project conducted in the early summer of 2022, analyzes what the students learned based on the feedback questionnaire of the students who participated, and examines the significance and results of this project.

**Key words** : Miyagi Prefecture, Public School, School Children with Foreign Backgrounds, Teacher Training Course Students, Learning Support